

【審査論文】

ビルドゥングと超越 — エマソンとドイツ翻訳理論

古屋耕平

Bildung and Transcendence: — Emerson and German Translation Theories —

Kohei FURUYA

要旨

本稿は、ゲーテ的あるいは古典主義的なBildungとしての翻訳、そしてロマン主義的な超越化及び普遍化としての翻訳、という二つの翻訳概念によって構造化されるエマソンの翻訳観について、初期の日誌を主に参照しながら、ドイツ翻訳理論の影響を中心に論じる。

キーワード：ラルフ・ウォルド・エマソン、アメリカ文学、アメリカン・ルネッサンス、ドイツ翻訳理論

1870年に初版が出版された *Society and Solitude* 所収のエッセイ“Books”において、“I do not hesitate to read all the books I have named, and all good books, in translations. What is really best in any book is translatable, — any real insight or broad human sentiment” (103)とエマソンは述べている。さらに続けて、エマソンは次のように語る。

I rarely read any Latin, Greek, German, Italian, sometimes not a French book in the original, which I can procure in a good version. I like to be beholden to the great metropolitan English speech, the sea which receives tributaries from every region under heaven. I should as soon think of swimming across Charles River, when I wish to go to Boston, as of reading all my books in originals, when I have them rendered for me in my mother tongue. (103)¹

このエマソンの翻訳についてのコメントは、あらゆる言語の本質的な翻訳可能性と他の言語や文化を固有化することのできる英語の包含力に対する揺るがぬ信頼と、おそらくは、文化的植民地主義と言語帝国主義に対する密かな賛意を示している。よく知られるように、エマソンは英語とアメリカ文学の隆盛を常に賞賛していたし、著述家としての長いキャリアを通じて、常に合衆国の文化的独立に向けての国家的な戦いの証言者であり賛同者であった。有名なエッセイの一つ“Self-Reliance”においては、エマソンは古いヨーロッパのモデルに依存した自国の文化的状況を嘆き、次のように述べている—“We imitate; and what is imitation but the travelling of the mind? Our houses are built with foreign taste; our shelves are garnished with foreign ornaments; our opinions, our tastes, our faculties, lean, and follow the Past and the Distant” (*LOA* 278)²。19世紀前半のアメリカを代表する公的知識人としてのエマソンの軌跡は、諸外国の文化、歴史、そして文学を翻訳することによって、自国の文化、歴史、文学を打ち立てんとする、

個人的かつ集合的な欲望をなぞっている。

しかしながら、全く新しいナショナルな文化や歴史を作ろうというエマソンの要求は、それ自体、ゲーテらが唱導した近代ドイツ翻訳理論を置き換えたものであったという事実は、大きな歴史の皮肉である。エッカーマンによるゲーテのインタビュー記録は、マーガレット・フラーの翻訳により、*Conversations with Goethe in the Last Years of His Life*としてアメリカで出版され人気となったが、その中で、ゲーテは「会話の言語」としてのフランス語の有用性については、“as everybody understands it, and in all countries it serves you instead of an interpreter” (121)として認めつつも、諸言語を自在に翻訳し取り込むことのできるドイツ語の包含力と柔軟さに関して、“he who knows German can dispense with many other languages” (121)と述べ、次のように言ったという。

But, as for Greek, Latin, Italian, and Spanish, we can read the best works of those nations in such excellent German translations that, unless we have some particular object in view, we may well dispense with spending much time upon the toilsome study of their languages. It is the German nature duly to honor every thing produced by other nations, and to sympathize fully with what is foreign. This, with great flexibility of our language, makes German translations both faithful and complete. And you get a great deal from a good translation. (121-22)

ゲーテの抱く、他の文化や言語を理解し自己固有化するための手段としての翻訳という概念は、コスモポリタンであると同時にナショナリスティック、あるいは普遍性志向であると同時に個別性志向という、近代ドイツ翻訳文化の重要な一側面を表している³。そして、冒頭に挙げたエマソンの一節も、ゲーテ的な翻訳理論のアメリカ版として読むことができる。ドイツ語の繁栄を祝うゲーテと同様に、エマソンも自国の言語である英語と、英語に基づいた自国の文化が世界に君臨することを願望したのである⁴。

18世紀後半から19世紀前半のヨーロッパ及びアメリカにおいて高等教育を受けた多くの若者と同様に、エマソンもイタリアへのグランド・ツアーを敢行している。但し、エマソンの場合は、南イタリアに始まりスコットランドに終わるといふ、他の多くの旅行者とは逆のコースを辿ることになった。この旅はエマソンにとって、外国の文化を肌で感じ、そこで獲得した外部の視点から、自分自身や自国の文化、さらには母国語を見つめ直す大きな機会となった。マルタ島の港では、“the wildest masquerade”のような人の群れに興奮し、“There jabbered Turks, Moors, Sicilians, Germans, Greeks, English, Maltese, with friars & guards & maimed & beggars. And such grotesque faces! ... The human family can seldom see their own differences of color & form so sharply contrasted as in this house”と書き記している(*JMN* IV 116)。しかし、同時に、その国際色豊かな港において、エマソンは自身の偏狭な物の見方を意識されられることとなる。人種の坩堝のような旅人の群れに好奇心を掻き立てられ興奮を隠せないのはエマソンを含むアメリカ人の側だけで、“cousins of Asia & Europe did not pay us the complement of a second glance” (*JMN* IV 116)であることにエマソンは気付く。また、マルタ島では、英語聖書のギリシャ語、イタリア語、アルメニア語、トルコ語への翻訳・出版に携わっているイギリス人のグループと出会い、グローバルな環境における翻訳の現場を観察する機会を得ている(*JMN* IV 118)。さらには、イギリス支配下にある同地における、「マルタ語版聖書の印刷禁止令」の存在を知り、イギリス主導の英語帝国主義の一端を垣間見ることになる(*JMN* IV 118)⁵。エマソンは、自身の外国語運用能力の低さに失望を感じつつも、時には、彼の「ひどいイタリア語」(*JMN* IV 133)で、地元の人々と会話を楽しんだりもしている。彼は、ヨーロッパにおける英語のマイナーな地位に気付かされ、他の旅行者たちの多くがフランス語、スペイン語、イタリア語を自在に操っているのを目の当たりにして、外国語習得の重要性について考えさせられることとなる(*JMN*

IV 139)。また、これらの観察と同時に、あらゆる芸術は“born in Europe & will not cross the ocean”であるという、アメリカ文化の後進性について大きなコンプレックスを抱くことになる(*JMN* IV 139)。

その後、イタリアを旅するエマソンの気持ちの中で、外国に滞在しているという状況に対する落ち着かない気分が、見慣れない土地や人々、文化や言語に対する最初の興奮に次第に取って代わることになる。観光客や物乞いやスリでごった返すナポリやローマの街には幻滅を感じ、“I had thought in my young days that this picture & one or two more were to surprise me with a blaze of beauty... but this familiar simple home-speaking countenance I did not expect”(*JMN* IV 153)と感慨を漏らす。また、バチカンでローマ教皇の儀式にも感銘を受けず、“[T]o the eye of an Indian I am afraid it would be ridiculous. There is no true majesty in all this millinery & imbecility. Why not devise ceremonies that shall be in as good & manly taste as their churches & pictures & music”(*JMN* IV 153)と記している。ここで、エマソンが自身の反カトリック感情を表現するのに、「インディアン」の視点に立ちながら、カトリック教会に「良き男らしい趣味」が欠けていることを批判しているのは興味深い。アメリカ的なアイデンティティの確立のために、ヨーロッパ的な洗練に対抗するものとしての、アメリカ文化のインディアン性を強調するというレトリックは、当時のナショナリスト的な文化修辞学の一例として見ることができる。さらには、カトリック教会と癒着したイタリア観光業の粗野な商業主義には嫌悪感を抱き、“These beggarly Italians!... [I]f you are presented to the Pope, it costs you five dollars”(*JMN* IV 154)と述べている。エマソンは次第に、“so civil & social”であると彼を感じる自国の男女と時を過ごすことに安心を覚えるようになり、一人の際には大きな孤独感を感じるようになる(*JMN* IV 158)。同時に、自身のイタリア語力が殆ど進歩しないことに苛立ち、“No man should travel until he has learned the language of the country he visits. Otherwise he voluntarily makes himself a great baby—so helpless & so ridiculous”(*JMN* IV 161)と嘆いている。そして、ペルージャ近郊の小さな町パシニャーノでは、“the clear pleasant air which savors more of New England than of Italy”(*JMN* IV 179)を感じることに喜びを隠さない。後に“Self-Reliance”において高らかに宣言することになる“[t]raveling is a fool's paradise”(*LOA* 278)という自身の哲学に対する確信は、旅の終わりに向けて次第に深まっていったようである⁶。

このイタリア旅行の道中、エマソンはゲーテの『イタリア紀行』を、旅のガイドブックとして、またドイツ語の教科書として、常に携帯していた⁷。外国の文学や文化を自己固有化することによって、アメリカの文化的独立を果さんと目論むアメリカの多くの文学者にとって、ゲーテが良いモデルとなったことは理解できる。David Damroschが指摘するように、「ゲーテはドイツ文化が田舎くさく、偉大なる歴史や政治的な統一感を欠いている事に対して、不安な感情を抱いていた」(*What is World Literature?* 8)。エマソンは、ゲーテのドイツの中に、合わせ鏡に写ったアメリカのマイナーな地位を見ている。*Representative Men*所収のエッセイ“Goethe; or the Writer”において、エマソンはゲーテを賞賛し、“[h]e lived in a small town, in a petty state, in a defeated state, and in a time when Germany played no such leading part in the world's affairs as to swell the bosom of her sons with any metropolitan pride”; yet “there is no trace of provincial limitation in his muse”(*LOA* 751)と述べている。田舎の作家から、世界的な文学の巨人へと登り詰めたゲーテの物語は、世界における自国文化のマイナーな立場に自覚的だったアメリカの作家達にとって、大きなお手本となったことは想像に難くない。

アメリカ文学の形成におけるドイツ翻訳文化の影響については、より広い角度から論じることができる。近代ドイツにおける翻訳の重要性は、純粋な言語的側面に留まるものではない。ドイツロマン主義における翻訳概念について包括的に論じた『他者という試練』において、アントワーヌ・ベルマンは「翻訳」と、

一般的には「文化」を意味し、「形成」「発展」「教育」といった様々な意味も含むドイツ語の“Bildung”の構造的な類似性に注目している。ベルマンによれば、“Bildung”とは、「過程であると同時にその所産」であり、「Bildungを通して個人、民族、国民、そればかりか言語、文学、広い意味での芸術作品は自らを形作ろうとし、そのようにしてひとつの形姿、ひとつの形象(Bild)を獲得する」のだと述べている(92)。また、ベルマンによれば、“Bildung”は、より広い意味でのドイツ的な「経験 (Erfahrung/experience)」概念の一部を成し、「個体から普遍への移行」であると同時に、「世界の他者性の経験」による、自己の(再)発見をも含意する(93)。そして、“Bildung”と「翻訳」の構造的な同質性とは、両者とも、「固有のものや同一者(すなわち既知のもの、日常的なもの、親しいもの)から出発して異なるものや他者(つまり未知のもの、驚異的なもの、^{ウンハイムリッヒ}不気味なもの)へと向かい、そしてその道行きの経験を終えて、再び元の出発点に戻ってくることを目指す運動」であるという点にある(96)。したがって、19世紀ドイツの翻訳概念は、18世紀後半以降のドイツで行われてきた他の様々な「^{トランスラシオン}移動」をも含意し、その例として「文献学、オリエント学、比較言語学、民話研究、各種国語大辞典、文芸批評・美術批評」の飛躍的な発展や「フンボルトの記念碑的世界探検」が挙げられるのだと、ベルマンは論じている(98)。

エマソンは、アメリカ文学や文化を打ち立てる手段として、ドイツ翻訳理論における“Bildung”としての翻訳という概念を輸入した。作家としての長い人生を通じて、エマソンは、ラテン語やフランス語、イタリア語、ドイツ語の様々なテキストの断片を翻訳しては日誌に記録し、自らの詩集*Poems*や*May-Day and Other Pieces*においても、世界の詩の自らの手による翻訳を載せている。そして、エマソンの翻訳概念も、やはりドイツにおける翻訳概念と同様に、一つの言語から他の言語へのテキストの移し替え以上のものであった。例えば、“The American Scholar”では、革命とは“to be wrought by the gradual domestication of the idea of Culture,” and the “main enterprise of the world for splendor, for extent, is the upbuilding of a man” (LOA 67)であるとエマソンは述べている。この、他者の文化を飼い馴らし自国の文化として利用することによってアメリカ的アイデンティティを打ち立てるという試みは、以後、様々な作品における重要なテーマとなった。“Heroism”においては、英雄神話の利用価値について説明しながら、次のように述べている——“All these great and transcendent properties [of the heroes] are ours. If we dilate in beholding the Greek energy, the Roman pride, it is that we are already domesticating the same sentiment” (LOA 377)。さらに続けて次のように述べる——“Massachusetts, Connecticut River, and Boston Bay, you think paltry places, and the ear loves names of foreign and classic topography. But here we are; and, if we will tarry a little, we may come to learn that here is best” (LOA 378)。

Representative Men は、このような他者の文化の自己固有化による自己の文化の確立というエマソンの思想的課題にとっての一つの答えとなっている。同作品の導入章“Uses of Great Men”では、外国語の本を読むことの価値について論じ、次のように言う——“Our affection toward others creates a sort of vantage or purchase which nothing will supply.... Other men are lenses through which we read our own minds” (LOA 616)。これらの引用箇所は、エマソンにとっての読書は、ベルマンが述べているようなドイツ的翻訳概念における、一つの往復運動としての“Bildung”と同じ意味をもっていることを示している。外国語の本を読むにあたって、アメリカ人は“need not fear excessive influence” (LOA 629)であるとエマソンは述べる。個人、国家、国語、文学、そして文化といったものは、物理的及び精神的な独立の段階へと到達する過程で、まずは外国の影響を全面的に受ける過程を潜り抜けなければならず、そのような段階を踏んではじめて自己のアイデンティティや自我を確立できるのであって、それは、“they cannot live without their parents”と思っていた子供が、やがて親元を離れて行き、それまでに起こる “[a]ny accident will now

reveal to them their independence”であると子供が認識するのと同じようなことだとエマソンは語る（*LOA* 629）。

このようなエマソンの翻訳及び読書の習慣に、多文化主義的でコスモポリタンな態度を見る批評家もいる⁸。Wai Chee Dimockは、ニューイングランドのトランセンデンタリスト達の文化においては、“there is nothing to stop a Hindu Sacred, the Bhagavad Gita, from being read side by side with the Christian Bible”（23）であったと論じる。しかしながら、そのようなコスモポリタンの折衷主義がしばしば、あからさまな愛国主義や自民族中心主義と一組になっていることは見逃せない。例えば、1845年の日誌にエマソンは次のように書いている——“Plato is no Athenian. An Englishman says how English! a German, how Teutonic! an Italian, How Roman & how Greek! It transcends sectional lines, the great human Plato.... Plato seems to us an American Genius”（*JMN* 9:248）。また、ディモックも引用する、日誌の他の箇所では、“A good scholar will find Aristophanes & Hafiz & Rabelais full of American history”（*JMN* 10:35）であると述べる。これらの箇所に、他者の文学や文化を自国の傘の下に包摂しようとするナショナリスト的欲望の表出を見出さないことは難しい⁹。また、上に挙げた、英語翻訳で世界のテクストを読むことの唱導に、ゲーテの“appropriating what is good in them, so far as we can use it”（Eckermann 203）という主張の反映を見出すことも容易であろう。

しかしながら、エマソンは常にゲーテに賛意を示していたわけではない。エマソンは、ゲーテの古典主義的、人文主義的な世俗性について批判し、そのドイツの巨匠は“moral sentiment”を欠いており、“pure truth”に対して無関心であると非難している（*LOA* 758）。またエマソンは、“this man was entirely at home and happy in his century and the world”（*LOA* 760）とも述べ、ゲーテに未来志向の欠如を見ている。ゲーテ自身、時には外国語に翻訳不可能な部分が存在することを認め、それらのドイツ語への翻訳可能性について留保の姿勢を表明している。『イタリア紀行』では、次のように述べている——「実にあらゆる国語の特質は、これを多国語に翻訳し能わざるものである。なぜならば、最も高尚なものから最も低俗なものに至るまで、すべての言葉は、性格、気質、或いはまた生活状態等、その国民の特異性に関連をもっているからである」（110-11）。また、他の箇所でも、次のように書いている——“The translator must proceed until he reaches the untranslatable; and then only will he have an idea of the foreign nation and the foreign tongue”（*Maxims and Reflection of Goethe* 171）。マーガレット・フラーが正しく述べた通り、ゲーテは必ずしも“Idealist”というわけではなかった（“Translator’s Preface” in Eckermann, *Conversations with Goethe* xiv）。

一方、ゲーテとは異なり、エマソンはあらゆる言語によるあらゆるテクストは翻訳可能であるという考えを抱いていたようである。“The American Scholar”では次のように述べている——“Emerson states that ‘he who has mastered any law in his private thoughts, is master to that extent of all men whose language he speaks, and of all into whose language his own can be translated’”（*LOA* 64）。“Vocabulary”と題した日誌の一節では次のように書く——“[I]n going through Italy I speak Italian, through Arabia, Arabic: I say the same *things*, but have altered my speech. But ignorant people think a foreigner speaking a foreign tongue a formidable, odious nature, alien to the backbone.... [L]ate in life, perhaps too late, we find he was loving and hating, doing and thinking the same *things* as we, under his vocabulary”（*JMN* 7:117）。冒頭で言及したエッセイ“Books”においては、必読書のリストを上げながら次のように語る。

I mean the Bibles of the world, or the sacred books of each nation, which express for each the supreme result of their experience. After the Hebrew and Greek Scriptures, which constitute the

sacred books of Christendom, these are, the Desatir of the Persians, and the Zoroastrian Oracles; the Vedas and Laws of Menu; the Upanishads, the Vishnu Purana, the Bhagvat Geeta, of the Hindoos; the books of the Buddhists; the “Chinese Classic,” of four books, containing the wisdom of Confucius and Mencius. (*Society and Solitude* 110-11)

エマソンは続けて次のようにも語る——“All these books are the majestic expressions of the universal conscience.... They are not to be held by letters printed on a page, but are living characters translatable into every tongue and form of life” (111)。しかしながら、世界の全ての宗教書は本当にエマソンが言うような「普遍的な良心の威厳のある表現」なのだろうか。それらは本当に「あらゆる言語に翻訳可能」であろうか。また、それらの宗教を信奉する人々は、このようなあらゆる宗教の本質は同じであるとするエマソンの普遍思想に納得するだろうか。これと近い文脈で、詩的想像力の本質に関するエマソンの見方も注目に値する。エッセイ“The Poet”においては、エマソンは次のように語っている。

But the quality of the imagination is to flow, and not to freeze. The poet did not stop at the color, or the form, but read their meaning; neither may he rest in this meaning, but he makes the same objects exponents of his new thought. Here is the difference betwixt the poet and the mystic, that the last nails a symbol to one sense, which was a true sense for a moment, but soon becomes old and false. For all symbols are fluxional; all language is vehicular and transitive, and is good, as ferries and horses are, for conveyance, not as farms and houses are, for homestead. Mysticism consists in the mistake of an accidental and individual symbol for an universal one. The morning-redness happens to be the favorite meteor to the eyes of Jacob Behmen, and comes to stand to him for truth and faith; and he believes should stand for the same realities to every reader. But the first reader prefers as naturally the symbol of a mother and child, or a gardener and his bulb, or a jeweller polishing a gem. Either of these, or of a myriad more, are equally good to the person to whom they are significant. Only they must be held lightly, and be very willingly translated into the equivalent terms which others use. (*LOA* 463-64)

しかしながら、どれほど多くの詩人たちが、それぞれが特定の場所で特定の時間に目にした「朝の赤」の「色」や「彗星」の「形」を表現するために、独自の表現を生み出そうと苦心してきたか、われわれは思いを巡らすかもしれない。そもそも、ある人の個別的な体験や思考や感情といったものを、その人の母語から（あるいは母語でなくとも、その場面で話されたり思考されたりしたかもしれない言語から）切り離して、「他の人が使う、同義の言葉に翻訳する」ことは本当に可能だろうか。少なくともエマソンは可能だと考えていたようである。個別性から普遍性への翻訳可能性を信じる限りにおいて、エマソンの翻訳観は、ゲーテの古典主義的翻訳観よりもより形而上学的であり観念主義的である¹⁰。

したがって、エマソンの翻訳理論はドイツロマン主義のそれに近づいていく。アントワーヌ・ベルマンはシェイクスピアのドイツ語翻訳者A. W. Schlegelに宛てたNovalisの手紙の中の、「あらゆる詩は翻訳」であり、「ドイツ語のシェイクスピアは今や英語のシェイクスピアよりすぐれている」という印象的な一節を取り上げている（『他者という試練』220）。ベルマンによれば、ドイツのロマン主義者たちは、翻訳は原典の「再現を目指す運動によって一つの累乗となる」ことによって、「原典に優るヴァージョンを産み出す」のだと考えていた(223)¹¹。このドイツロマン主義における翻訳理論について、ベルマンは次のように要約する。

この累乗はただ単純に自然のままの原典……を目標とするのではない。原典それ自身にも、ロマン

主義者たちがその「傾向」^{テンデンツ}と呼ぶところのものに沿った、ひとつの先験的な狙いがあるからだ。それは作品がそうありたいと望み、そうあることを（作者の意図から独立しているにせよそうでないにせよ）目標としつつも、経験的には決してそれがかなうことのない〈作品〉という〈理念〉^{イデー}である。原典もこの意味では、自分の存在を司り、存在に必然性を与えてくれるその先験的な形象の複製^{コピー}——そういつてよければ翻訳——にすぎないわけだ。ところで、翻訳とはまさにそうした〈理念〉、^{オリジナル}原典の^{オリジン}起源に照準を定めるものである。その狙いによって翻訳は最初のテキストと比較して必然的に「よりよい」テキストをつくり出す。……別のいい方をするなら、翻訳されることによって作品は、自身に内在する目標に近づくとともに、自身を有限性に押しとどめようとする重力から離脱する。翻訳、つまり作品の二番目のヴァージョンは作品をそれ自身の真理へと接近させるということだ。（223-24）

ベルマンによるドイツロマン主義の翻訳理論の解説は、そのままエマソンの例にも当てはめることができる。例えば、“Uses of Great Men”においてエマソンは次のように述べている——“Each material thing has its celestial side; has its translation, through humanity, into the spiritual and necessary sphere where it plays a part as indestructible as any other. And to these, their ends, all things continually ascend”（LOA 619）。Sonia Di Loretoは、エマソンにとって“the work of translation becomes the journey from the material world to the spiritual sphere”であると論じ、それは“an unveiling of something that is already there, that has always been there, because the core of every language remains the same”なのだと述べている（93）。エマソンが“When we are exalted by ideas, we do not owe this to Plato, but to the idea, to which, also, Plato was debtor”（LOA 623）という断言も、このようなドイツロマン主義の翻訳理論の文脈において理解できる。晩年の著作集 *Letters and Social Aims* 所収のエッセイ“Quotation and Originality”において、エマソンのドイツロマン主義的翻訳観が最もわかりやすい形で表されている。初期のエッセイとは違い、ここでエマソンは“there is no pure originality”であり、“[a]ll minds quote”であるとあっさりと認めている（94）。様々な言語から翻訳された様々な引用を取り上げながら、エマソンは次のように述べる——“The originals are not original. There is imitation, model, and suggestion, to the very archangels, if we knew their history”（94）。さらに、シェイクスピアに向けられた、過去のテキストから多く盗用したという非難から同作家を擁護しつつ、エマソンは次のように主張する——“Yet he was more original than his originals. He breathed upon dead bodies and brought them into life”（100）。Nikhil Bilwakeshは、エマソンはサンスクリット語を含む諸外国語の翻訳を“evidence of an Anglo-Saxon cosmopolitanism that allowed that race to flourish on every continent in the nineteenth century”と見なしており、翻訳を通じたナショナリズムの顕揚に貢献した先人たちへのエマソンの賛意は、エマソンが自身の詩集に外国語の詩の翻訳を多く含んだことに表れていると論じている（35）¹²。

エマソンの翻訳の概念が、単なる言語間の言葉の移し替え以上の意味を持っていたことにも、われわれは注目しなければならない。19世紀を通じて人気を博したNoah Websterの *An American Dictionary of English Language* における“translation”の定義では、例えば次のような例文が挙げられている——“The Old Testament was translated into the Greek language more than two hundred years before Christ. The Scriptures are now translated into most of the languages of Europe and Asia”（n.p.）。これは、エマソン自身、イタリア旅行の最中に目撃したように、19世紀前半までの言語間翻訳の発展において、聖書の翻訳が重要な位置を占めていたことの証左として読むことができる。同じ項目における“translation”の定義は、さらに次のようなものも含んでいる——“[t]o remove or convey to heaven, as a human being, without

death” (n.p.)。本稿で論じる余裕は無いが、この「人間を生きたまま天国に移送する」という意味での「翻訳」も、後のエマソンの思想において重要な意味を持つてくる。

広い意味での翻訳という概念は、エマソンの執筆過程において中心的な位置を占めることになる。彼の翻訳観は、ゲーテ的あるいは古典主義的なBildungとしての翻訳、そしてロマン主義的な超越としての翻訳、という二つの翻訳概念によって構造化されている。前者は、自己（さらには、言語、国家、文化）と他者との安定的で穏やかな関係を志向する円環的な運動によって特徴づけられる。一方、後者は、自己と他者との境界線を飛び越える上昇的な運動によって特徴づけられる。前者は自己の確立を目指し、後者は自己と他者との差異を超えた普遍性を目指す。これら二つの運動は、エマソンのテキストの中で、密接に絡み合いながら、翻訳できないものへの気付くと、それを乗り越えようとする欲望に突き動かされて、周りながら登ってゆく上向きの螺旋運動を生み出している。そのような螺旋運動が、エマソンの諸作品においてどのように表れているのかについては、またの機会に論じなければならない。

本稿は科研費若手研究(B)25770113の助成を受けて行われた研究の一部である。

註

- 1 同エッセイは、最初に1858年1月発行の*Atlantic Monthly*誌上に発表された。同作品の成立過程については、*CW* 7 xix-xxiを参照。また、上の一節の元になっていると思われる箇所は、エマソンの1843年3月23日の日誌に見られる。“Translations”と題された一節は以下の通りである。
 I thank the translators & it is never my practice to read any Latin, Greek, German, Italian, scarcely any French book, in the original which I can procure in an English translation. I like to be beholden to the great metropolitan English speech [,] the sea which receives tributaries from every region under heaven, the Rome of nations, and I should think it in me as much folly to read all my books in originals when I have them rendered <in>for me in my mother's speech by men who have given years to that labor, as I should to swim across Charles River when ever I wished to go to Charlestown. (*JMN* 8: 357)
- 2 以下、*The Journals of Ralph Waldo Emerson*は*JMN*、*The Library of America*は*LOA*、とそれぞれ省略し、巻号は数字で記す。
- 3 ゲーテのエマソンへの影響については、van Cromphout, *Emerson's Modernity and the Example of Goethe*を参照。
- 4 以上の点については、古屋「アメリカン・ルネッサンスと翻訳—メルヴィルの場合」(75-6)において既に一部言及しているが、本稿における議論の性質上必要なため、改めてここで言及した。
- 5 大英帝国のインドにおける英語単一言語政策については、例えばBhabha 150-51を参照。
- 6 続けて、エマソンはイタリア旅行全体に対する感想として次のように述べている。
 Our first journeys discover to us the indifference of places. At home I dream that at Naples, at Rome, I can be intoxicated with beauty, and lose my sadness. I pack my trunk, embrace my friends, embark on the sea, and at last wake up in Naples, and there beside me is the stern fact, the sad self, unrelenting, identical, that I fled from. I seek the Vatican, and the palaces. I affect to be intoxicated with sights and suggestions, but I am not intoxicated. My giant goes with me wherever I go. (*LOA* 278).
- 7 *JMN* IV 178, n. 34を参照。
- 8 エマソンの非西洋の翻訳作品の読書については、Carpenter, *Emerson and Asia*、Christy, *Orient in American Transcendentalism* 61-184、Yohannan, “Emerson's Translations of Persian Poetry from German Sources”、Versluis, *American Transcendentalism and Asian Religions* 51-78、Bilwakesh, “Emerson, John Brown, and Arjuna: Translating the Bhagavad Gita in a Time of War”を参照。
- 9 Versluisは“the history of Transcendentalism is in fact a history of interpretation and of transformation, and in some ways of an intellectual colonialism”であると論じている (*American Transcendentalism and Asian Religions* 4)。
- 10 ゲーテは同時代のロマン主義思想とは一定の距離を置き、“the classical is *health*, and the romantic, *disease*” とまで言っている (*Maxims and Reflections* 166)。
- 11 Versluisも次のように論じている——“Novalis was a predecessor for Transcendentalism in this tendency to regard the various traditions as reflecting a central reality: to him, as to Emerson and Thoreau, the various names were not nearly so significant as the Transcendent reality that they signified” (21)。
- 12 Bilwakeshは、翻訳を通じたナショナリズムの顕揚に貢献した先人たちの例として、エマソンが“somewhat obscure translators

such as Thomas Taylor and J. J. Garth Wilkinson”に言及していることを指摘する(35)。

引用文献

- Bhabha, Homi K. *The Location of Culture*. London: Taylor & Francis, 1994. Print.
- Bilwakesh, Nikhil. "Emerson, John Brown, and Arjuna: Translating the Bhagavad Gita in a Time of War." *ESQ* 55.1 (2009): 27-58. Print.
- Boggs, Colleen Glenney. *Transnationalism and American Literature: Literary Translation 1773-1892*. New York: Routledge, 2007. Print.
- Carpenter, Frederic Ives. *Emerson and Asia*. Cambridge: Harvard UP, 1930. Print.
- Christy, Arthur. *The Orient in American Transcendentalism*. New York: Octagon Books, 1960. Print.
- Damrosch, David. *What Is World Literature?* Princeton, NJ: Princeton UP, 2003. Print.
- Di Loreto, Sonia. "'I Turned It All into English': R.W. Emerson as Translator of Dante's La Vita Nuova." *Emerson at 200: proceedings of the International Bicentennial Conference* (2004): 79-93. Print.
- Dimock, Wai-chee. *Through Other Continents: American Literature across Deep Time*. Princeton: Princeton UP, 2006. Print.
- Eckermann, Johann Peter. *Conversations with Goethe in the Last Years of His Life*. Trans. Fuller, Margaret. Boston: Hilliard, Gray, and company, 1839. Print.
- Emerson, Ralph Waldo. *Essays: First and Second Series*. Vintage Books, 1990. Print.
- . "The American Scholar" *Essays: First and Second Series*. Vintage Books, 1990. 51-72. Print.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 4: Belknap Press, 1964. Print.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 9: Belknap Press, 1971. Print.
- . *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*. Vol. 10: Belknap Press, 1973. Print.
- . *Letters and Social Aims*. Belknap Press, 2010. Print.
- . *Society and Solitude*. Belknap Press, 2007. Print.
- Fuller, Margaret. "Translator's Preface." *Eckermann, Johann Peter. Conversations with Goethe in the Last Years of His Life*. Boston: Hilliard, Gray, and company, 1839. Print.
- van Cromphout, Gustaaf. *Emerson's Modernity and the Example of Goethe*. Columbia: U of Missouri P, 1990. Print.
- Versluis, Arthur. *The Esoteric Origins of the American Renaissance*. Oxford; New York: Oxford University Press, 2001. Print.
- von Goethe, Johann Wolfgang. *The Maxims and Reflections of Goethe*. Trans. Thomas Bailey Saunders. New York: Macmillan and Company, 1893. Print.
- Webster, Noah. *An American Dictionary of the English Language: Exhibiting the Origin, Orthography, Pronunciation, and Definitions of Words*. New York: S. Converse, 1828. Print.
- Yohannan, J. D. "Emerson's Translations of Persian Poetry from German Sources." *American Literature* 14.4 (1943): 407-20. Print.
- ベルマン、アントワヌ 『他者という試練: ロマン主義ドイツの文化と翻訳』 みすず書房、2008年。

古屋 耕平（和洋女子大学 人文社会科学系 助教）

（2014年10月14日受付）